



世界ミステリ全集

11



警官嫌い
殺意の楔
暴力教室

エド・マクベイン



早川書房

世界ミステリ全集 11

エド・マクベイン

「警官嫌い」井上一夫訳

「殺意の楔」井上一夫訳

「暴力教室」井上一夫訳

〈検印廃止〉

1972年5月20日初版印刷 1972年5月31日初版発行

発行者 早川 清 東京都千代田区神田多町2〜2

発行所 株式会社早川書房 東京都千代田区神田多町2〜2

電話 東京(254)1551〜8 振替 東京47799

印刷所・株式会社享有堂印刷所 製本所・株式会社明光社

本文用紙・本州製紙株式会社

表紙クロス・本州リンソン／英国ワトソン社製

函紙・駿河製紙株式会社

製函所・株式会社佐藤製函所

定価 1400円

〈乱丁本・落丁本は本社にてお取り替えます〉

0397-807110-6942

目次

警官嫌い……………3

殺意の楔……………181

暴力教室……………335

エド・マクベインについて〈座談会〉……………651

エド・マクベイン著作リスト……………681

函・扉・表紙／勝呂 忠

警
官
嫌
い

井上 一夫 訳
エド・マクベイン

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1972 Hayakawa Shobo

COP HATER

by

ED McBAIN

Copyright © 1956 by

ED McBAIN

Translated by

KAZUO INOUE

Published 1972 in Japan by

HAYAKAWA SHOBO & CO., LTD.

This book is published in Japan by direct arrangement
with SCOTT MEREDITH LITERARY AGENCY, INC.

ド
デ
ィ
ー
と
レ
ィ
に

この小説に現われる都会は架空のものである。

登場人物も場所もすべて虚構である。

ただし警察活動は実際の捜査方法に基づいている。

警
官
嫌
い

登場人物

- スティーヴ・キャレラ……………87分署の刑事
マイク・リアダン……………同
ハンク・ブッシュ……………同、赤毛の大男
デイヴィッド・フォスター……………同、黒人
ハル・ウィリス……………同、小柄で柔道の達人
ロジャー・ハヴィランド……………同、デカ牡牛の仇名にふさわしい男
ピーター・バーンズ……………87分署捜査主任、警部
バート・クリング……………87分署の新米警官
アリス・ブッシュ……………ハンク・ブッシュの妻
フランク・クラーク……………・45口径拳銃を持っていた男
デイヴィッド・ブロンキン……………・45口径拳銃を持っていたもう一人の男
よろめきオーディッツ……………麻薬患者
びっこのダニー……………警察のスパイ
ママ・ルッツ……………赤線のマダム
カミソリ・ラファエル……………愚連隊の少年
ミゲル・アレッタ……………同
ポール・マーサー……………職工
テディ・フランクリン……………キャレラの恋人
クリフ・サヴィジ……………新聞記者

北辺を流れる河からは、市は空にそびえる巨大な屋根の輪郭しか見えない。見上げるものは、何か畏怖に似たものを覚え、ときにはあまりの壮麗さに息を呑むくらいである。空の青さに喰い入るようにそりたつ建物のくっきりした輪郭、平たい面もあれば高々とそびえ立つ断面もあり、雑然とした矩形と針のように尖った屋根、尖塔、避雷針。紺青と白のぼかしの大空に、あらゆる形が幾何学的調和をもつて並んでいる。

しかも夜、リヴァー・ハイウェイに出れば、目くらめくばかり輝く太陽の群れ、河から一筋に続く光の糸が、彼方南の果てに華麗な電光の魔法を展開する市に通ずるのを見て、思わずわれを忘れてしまうだろう。ハイウェイの街灯は、びっしりと市の北辺を遙か彼方まで輝き、暗い河面に影を映している。ビルの窓々は輝く光の四角い発光体。高

高と積み重なって星にまで届き、夜空を焦がす赤と緑、黄とオレンジのネオンの反映に溶けこむのだ。行き交う車は巨大な日玉を輝かせ、ステム大通りに輝く白熱の光が目痛くなるような光の洪水と色彩の氾濫にからみ合っている。市はきらめく寶石のケースのようだった。キラキラと脈打つように光を変えながら、幾重にも重なって輝いている。そそり立つビルは舞台のセット。

ビルは河に向い、人工の華麗さに輝き、人はそれを見て畏怖を覚え、息をこらす。

だが、そのビルの背後、輝く明りのかげには街がある。街にはごみもあるのだった。

目覚まし時計は午後十一時に鳴った。

暗闇を手さぐりで手をのぼし、時計の裏のレバーを見つけると、それを押しこんだ。ベルが止る。部屋はいやに静まりかえっていた。隣りに寝ているメイの、おだやかな寝息が聞える。窓は大きくあけてあったが、蒸し暑かった。彼はここで、夏のはじめから買いたいと思っていた冷房装置のことをまた考えた。しぶしぶ起き上ると、ハムのような大きな拳で目をこする。

彼は大きな男だった。髪はいましくしゃくしゃになつてい

るが、癖のない金髪。目はいつもはグレイなのだが、眠さにはれぼったい上に、暗闇の部屋のなかでは、色は全く見えないも同然だった。彼は立ち上って伸びをする。パジャマのズボンだけで寝ていたので、頭上に手を伸ばすと、緊っただぶつてない下腹をすっとズボンがずり落ちてしまふ。彼はふんと鼻を鳴らすと、ズボンを引き上げて、またメイに目を向けた。

シーツはベッドの裾にまるまって、汗に湿った生なき固まりとなっている。メイはく字なりにまるまって寝ていた。寝巻が腿の上までまくれ上っている。彼はベッドのそばへ行き、ちよつと手をその腿に当てた。メイがむにやむにやいつて寝返りを打つ。暗いなかで、彼はにやりと笑うと、浴室へひげ剃りに行った。

こういう身仕度の仕事はいちいち時間を計つてあるので、ひげ剃りに何分かかるか、服を着るのに何分かかるか、インスタント・コーヒーを一杯飲み乾すのにどれだけ時間がかかるか正確に分っているのだった。ひげを剃りにかかる前に、腕時計をはずして洗面台に置いたが、これはちよくちよく時間をのぞくのに便利だからだ。十一時十分には、彼は服を着はじめた。弟がハワイから送ってくれたアロハ・シャツを着て、薄茶のギャバジンのズボンをはき、薄手

のボブリンのジャンパーを着る。ハンカチを左の尻のポケットに入れ、整理箆箭の上の財布と小銭をかき集める。

箆箭の一番上の引出しをあけると、メイの宝石箱の隣りに置いてある・三八口径拳銃を出した。革鞆の固い革を指ですつとなざると、ボブリンのジャンパーの裾をまくつて、右の尻のポケットに革鞆ごとつこんだ。煙草に火をつけ、台所に行つてコーヒー用の湯をかけると、子供たちのようすを見にいった。

ミッキーはよく眠っていた。あいかわらず拇指を口に入れている。息子の頭をなでてみる。うわッ！ こいつは豚みたいに汗をかいてるぞ。メイともう一度冷房装置のことを相談しなければなるまい。この蒸し風呂みたいな部屋にとじこめては、子供たちがかわいそうだ。彼はキャシーのベッドのところへ行つて、同じことをやつてみた。キャシーは兄ほど汗をかいてはいなかった。やつぱりこいつも女の子だ。女はあまり汗をかかないからな。台所でやかんがしゅうしゅうと大きな音を立てているのが聞えた。腕時計をのぞいて、彼はまたにやりと笑う。

台所へ行くと、大きな茶碗にインスタント・コーヒーを茶匙二杯いれ、その上に熱湯をそそいだ。砂糖も入れずにブラック・コーヒーのまま飲む。やつと目が醒めたような

気がした。彼はこれが百回目ぐらいかもしれないのだが、夜出かける前に一眠りするなんてことは、もう二度としないぞと誓った。まったく馬鹿らしいだけだ。帰ってからゆっくり眠ればいいんだ。いたい、こんな寝かたをして、平均何時間眠れるというんだ？ 二時間ぐらいか？ すぐに起きる時間になっちまう。もう止めだ、馬鹿らしい。このことも、メイと相談しなければならぬ。彼はコーヒーを飲むと、また寝室に入ってしまった。

メイの寝姿を見るのが彼は好きだった。メイが眠っているのにつけこむような気がして、ちょっと卑屈なようなエッチな気もする。眠りというのは個人の秘密のようなもので、人が完全に眠りこんでるところをうかがうのは感心したことではない。しかし、寝姿がきれいだというんだから、別に悪いこともなからう。しばらくメイを見つめていた。枕の上に黒っぽい髪がばさりと拡がり、腰と腿の豊満なふくらみ、裾を乱した白い肌のこぼれる色気。彼はベッドの脇に行き、こめかみの髪を後ろへかき上げてやった。ごく穏やかに唇をつけたのだが、彼女ももぞもぞと動いて、「あなた？」とつぶやく。

「おやすみ」

「お出かけ？」かすれた声でメイがつぶやく。

「ああ」

「気をつけてね、マイク」

「うん」彼はにやりと笑った。「お前も、おとなしくしてるんだぞ」

「うふむ」メイは呟くと、寝返りをうって枕に顔を埋めてしまった。彼は戸口でもう一度そっとメイをふりかえると、居間を抜けて家を出た。時計をのぞくと十一時半。いつものとおりだ。これで表が涼しくなければやりきれない。

十一時四十一分。マイク・リアダンが勤め先の三丁ばかり手前に来ると、弾丸が二発、その後頭部にとびこんで、顔の半分を吹き飛ばして前に抜けた。彼が感じたのは衝撃と、耐えられないほどの急激な痛みだけで、やがて、かすかな銃声を聞いたと思うと、頭のなかがまっ暗になり、彼は舗道に崩れ折れてしまった。倒れる前に彼は死んでいた。

この市のまっとうな市民であった彼が、いま撃ちくだかれた頭から血を吹き、あたりにねばねばした赤いしみを拡げて倒れている。

十一時五十六分、この市の別の住人がそれを発見し、警察に電話にいった。公衆電話のボックスに走っていった

その市民と、コンクリートの路上に崩れ折れて死んでいる
マイク・リアダンという市民とは違ったところはごく僅か
しかない。

ただ一つ違うだけだった。

マイク・リアダンは警官だったのである。

2

歩道の死体を殺人課の刑事が二人で見おろしていた。暑い夜で、路上のねばっこい血に蠅が群がっていた。検視官補が死体の脇にひざまずいて、鹿爪らしく死体を調べている。鑑識のカメラマンが、せわしげにフラッシュをたいている。通りの向う側にはバトカー二三号と二四号が止っていて、バトカーの巡査たちが憂鬱そうに野次馬を追っばらっていた。

最初の電話は市警本部の二つある電話交換台の一つに入った。そこでは、眠そうな巡査がいつものうげにそういう情報を受けている。やがてメモが圧搾空気伝送管で無線室に送られる。無線室のバトカー司令係は、背後の壁の大きな管区地図と相談して、バトカー二三号に路上に血まみれで倒れているという男を調査、報告せよと指令する。二三号から殺人事件だと報告してきたので、二四号を呼び出

して現場にやった。同時に交換台の巡査は北市警本部殺人課と、死体発見の場所を管轄する八七分署に電話していた。

死体は空家になって板で囲われている劇場の前に倒れていた。この劇場も最初は封切館として出発したのだが、それもこのあたりが繁昌していた何年も前の話。近所が寂れてくるにつれ、二流館から名画座ということになり、しまいには外国語の映画の古物を上映する小屋になりさがってしまった。小屋の左手にドアがあり、そこも一度は板を打ちつけてあったのだが、いまはその板は引っぺがしてあって、なかの階段には煙草の吸い殻やウィスキーの空瓶、コンドームなどが散らばっている。歩道の上にせり出している小屋のひさしは、ギザギザの穴だらけ。石や空罐、鉛管の切れ端やその他もろもろのガラクタを投げつけられた名残りだ。

劇場の向いは空地になっていた。かつてはここにアパートが一軒立っていた。家賃の高い高級アパートで、当時は大理石張りの玄関からミンクのコートのご婦人が出入りしたのも珍しいことではなかった。しかし、雑草のように根強くはびこって行く貧民窟の蔓が、じわじわとここにも手を伸ばして、執拗な指先でがっちりとかんでひろがるいっぽうのその輪のなかに呑みこんでしまったのだ。古く

ったその建物は、ついに屈服して貧民窟の一部となり、いまでは気位の高い優雅なアパートだったことを思い起してくれる人間もめったにない。そのうちに、老廃建造物として立退き命令が出て、取りこわしになる。いまではこの敷地は、ところどころに執念くへばりついている煉瓦の山以外には、何もないきれいな空地になっていた。噂によると、市の住宅建設計画にこの土地も含まれているという。それまでは、子供たちがこの空地をいろいろと利用していたのだ。しかも、生理的な用途に使うのが大部分なので、空地にはつねに異臭が漂っている。暑い夏の夜はその匂いがことに強く、劇場のほうまで漂ってきて、吊りびさしの天蓋の下にこもり、歩道に倒れた死体の屍臭と混って生臭い匂いを立ちこめていた。

殺人課の刑事の一人が、死体から離れて歩道を調べはじめた。もう一人の刑事は、ズボンのポケットに両手を突っこんで立っている。検視官補が、死んだと分りきっている男の死体に、死亡確認のお定まりの手つづきを一応やっていた。歩道を調べていた刑事が帰ってきた。

「見ろよ」

「何だい？」

「空葉莢二個だ」

「それで？」

「レミントンの弾丸だ。・四五口径」

「封筒に入れて札をつけとけ。先生、もういいですか？」
「すぐだよ」

フラッシュがあいかわらず閃いている。カメラマンは、大当りのミュージカルの写真を撮る新聞カメラマンみたいに、派手に写真を撮りまくっていた。ショオのスターのまわりをまわって、いろんな角度から撮りまくる。ぶすつと無表情で仕事をしていた。背に汗が流れて、シャツが肌にくべたついている。検視官補が手で額をこすった。

「八七分署の連中は、何してやがんだろう？」刑事の一人がいった。

「ボーカーの大勝負でも開帳してらんだろう。あんな連中は来ないほうがいいさ」彼は検視官補に向った。「どうなんですか先生？」

「終ったよ」検視官補は力なく立ち上った。

「何か分りましたか？」

「ごらんのとおりさ。後頭部を二発撃たれてる。おそらく即死だね」

「時間は？」

「傷口を見ただけでか？ 冗談じゃないぜ」

「検視の先生ってのは、奇蹟を行うと思ってましたがねえ」

「そりゃあ、やるよ。しかし、夏場は駄目だ」

「見当もつきませんか？」

「そう、見当だけなら自由だからな。まだ、死後硬直が現われてないから、三十分ぐらい前にやられたといっているだろう。もっとも、この暑さだから……何時間も生きてた時の体温を保っていられるかもしれないなあ。うかつなことをいうと、こっちの立場がまずくなるかもしれないな。これでは、解剖した後でも……」

「いいですよ、分りました。身許を調べてみてもいいでしょうね？」

「鑑識の連中が困らんように、死体はあまりいいじりまわすなよ。では引き上げるか」検視官補は時計を見た。「時間をつけとけよ、十二時十九分だぜ」

「今日は忙しいぜ」殺人課の刑事は、そういうと、現場到着の時からつけていた時間表にその時間を書きこんだ。

もう一人の刑事は、死体のそばに膝をついていたが、急に顔を上げていった。「武器を持ってるぞ」

「ほう？」

検視官補は額の汗を拭きながら歩き去った。